



薩摩郷中教育をモデルとした 世代・職種を超えたシームレスな 防災教育への取り組み

鹿児島県 始良市ジュニア・リーダークラブ「どんぐり」
シニア・リーダー 加治木 梨々華



1 はじめに

鹿児島県始良市は鹿児島県本土の中央に位置し、人口は78,053人（令和4年7月1日現在）で増加傾向にあり、発展を続けているまちです。

ジュニア・リーダー（以下、JL）とは、子ども会活動から誕生した組織であり、中学生・高校生がリーダーとしての資質を磨きながら、子ども会等での活動の活性化を図る組織です。始良市ジュニア・リーダークラブ「どんぐり」は、市内在住の中学生・高校生約20名で組織され、子ども会活動などの地域活動を中心に、小学生の指導や事業運営の補助を行っています。私たちJLは令和2年から市消防本部と協働し、小学生へ向けた防災教育活動に取り組んでいます。事業を進めるにあたり、薩摩藩において古くから行われていた郷中教育をモデルとして、活動を進めてきました。

2 薩摩藩の郷中教育について

郷中教育とは、薩摩藩特有の青年教育の仕組みです。地域ごとに青年が集まり、自主的で自発的な教育活動を行っていました。先輩が後輩を指導し、同級生同士は助け合い、高め合うという教育方法です。

防災教育活動を進めるにあたり、郷中教育の特性から、子どもたちが効果的に学ぶためには、①身近な地域における学習であること、②子どもたちの知識や能力に合わ

せた学習であること、③子どもたちが危機意識を共有し合い、主体的に取り組める学習であることが必要であると考えました。

子どもたち同士による学び合いは議論が深まりやすく、より実践的で具体的であり、自分がまさに知りたい情報を共有できることから、学ぶ意欲を効果的に高めるという好循環が起こります。大人と子どもという縦の関係では成し得ない効果が郷中教育にはあると考えました。

3 世代・職種を超えた防災教育事業

郷中教育をモデルとした防災教育事業を進めるにあたり、まずは私たちJLが災害について学ぶところから始めました。JL自身も、災害についての理解は十分ではなかったため、夏休みの2日間を利用し、救命救急センターの医師や大学教員、消防士が講師となり、災害に関する基礎知識や避難所運営ゲーム（以下、HUG）の進め方、災害食、災害時の連絡方法についての研修会を行いました。

ここで習得したことを次の世代に引き継



医師による災害基礎研修

ぐため、市教育委員会主催事業「AIRAふるさとチャレンジャー」において、JLが指導者となって小学生に対してHUGを行い、災害時の避難所運営に必要なことについて、一緒に学習しました。

HUGのカードの中には小学生では難しい内容も多く含まれていますが、年齢に近いJLが、小学生の理解しやすいカードを選別したり難しい言葉を解説したりすることで、より効果的な学習へと繋がりました。

また、医師や看護師、栄養士、消防士とJLが協働し、小学生に対して、放水訓練やAEDの使い方、災害食の実食、エコ体験、トリアージなどを幅広く指導しました。私たちJLは、段ボールベッドの組み立て方や公衆電話の使い方を中心に指導を行いました。



JLによるHUG訓練



段ボールベッド組み立て方指導



公衆電話の利用方法の指導

4 さいごに

JLが指導者として防災教育活動に参加することで、参加者である小学生の学習意欲や課題意識を高め、主体性を効果的に高めることができました。また、専門職・多職種による指導を小学生が体験的に学習することで、積極的な学びへと繋がりました。

さらに、事業を通して、子どもたちが消防職や医療職などを身近に感じることができ、キャリア教育の観点からも高い効果がみられました。

日頃から子ども会と連携しているJLを中心に、防災の「郷中教育」を推進することで、地域の防災力を高めることが期待できます。今後の課題として、より身近な自治会や町内会単位の子ども会組織と連携した防災教育活動をどのように展開していくか、JLなどの指導者への講習を継続的に充実させていけるかという点が挙げられます。昨年度から、桜島の大規模噴火を想定したHUGを行うなど、私たちの活動は広がりを見せています。地域の繋がりの希薄化が課題となる昨今、災害教育活動こそが地域の繋がりの重要性を住民に再認識させ、その他の地域活動にも活かされていくきっかけになると感じています。